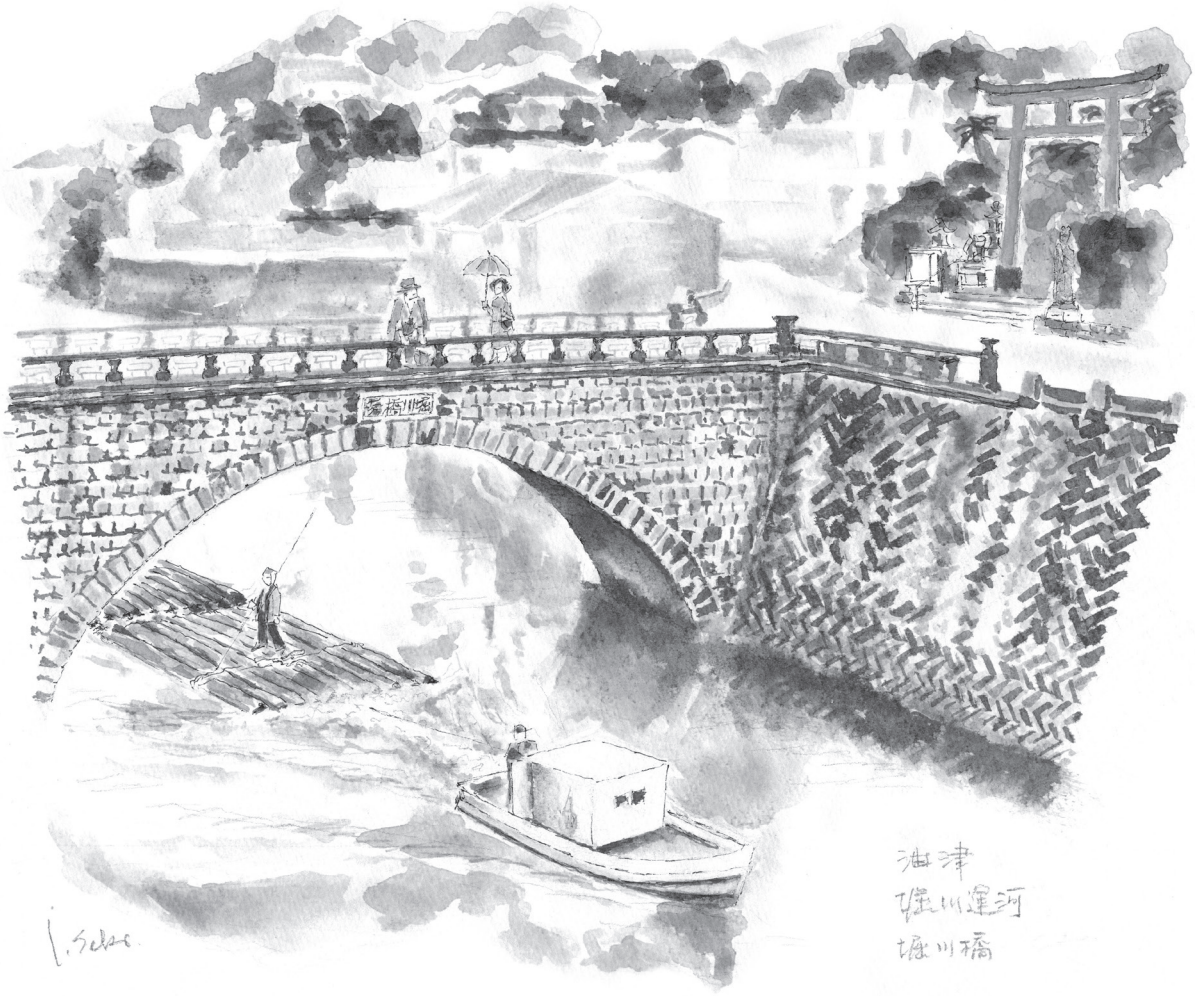
令和３年12月20日発行（年４回発行）

会報 河川文化

第96号
令和3年12月



Contents

巻頭言
長良川おんぱくの10年
―川の文化が人と人をつなぐ―　蒲　勇介　2

【シリーズ／河川文化を語る】
戦国武将・武田信玄運命を決した信玄堤　加来　耕三　4

特集「運河の歴史と文化」
日本一長いみやぎの運河群
―再生・復興の歩み―　舛谷　成幸　8

「見沼通船堀」について　青木　義脩　10

「荒川ロックゲート」と舟運ネットワーク　三輪　尚子　12

利根運河
―水運から希少動植物の時代へ―　新保　國弘　14

都市計画・橋りょう・河川的視点からみた富士運河　山中　久生　16

半田運河の変遷
―港と新田―　曲田　浩和　18

松江城の壕と人びとの暮らし　林　秀樹　20

筑豊炭田の石炭輸送路「堀川」運河　吉田　浩之　22

マレーシア便り(5)
クアラが支えたマラッカ王国　渡邉　浩　24

川の本　25・33

落語と川㉛「ねぎまの殿様」　竹内　宏　26

万葉の川㊹　放生津潟　井上　克彦　27

市民活動紹介
上・下流住民の交流による地域連携型で自然と人間の共生を目指すドラゴンリバー交流会　高嶋　了一　28

寄稿
永平寺町を流れる九頭竜川からメダリストを出す！
パドリングビレッジ構想　田中　謙次　30

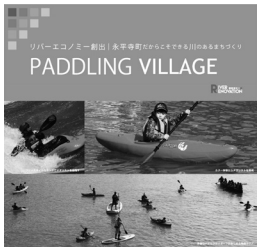
会報「河川文化」創刊100号に向けたアンケート（結果）　34

協会活動日誌　38

寄稿

永平寺町を流れる九頭竜川からメダリストを出す！

パドリングビレッジ構想



田中 謙次
一般社団法人環境文化研究所 代表理事

1．はじめに

「水と緑と歴史に学ぶまちで、目指すはメダリスト！」

これが、私たち「パドリングビレッジ構想」のコンセプトである。この構想を実現する九頭竜川は、岐阜県との県境にある福井県大野市（旧和泉村）の油坂峠付近に源を発し、坂井市三国町の三国港を河口とする延長116㎞に及ぶ県内を代表する一級河川である。九頭竜川を抱える福井県嶺北地方は、日野川、足羽川、真名川など多くの支川を抱えた流域で、その面積（2,930㎢）は、福井県の約70%にもなる。

メダリストを目指す地域は、曹洞宗大本山永平寺を有する永平寺町で、九頭竜川中流域に位置する。

2．パドリングビレッジとは

(1) 目指すはメダリスト

2017年、フリースタイルカヤック（2018年W杯第4位）の松永和也選手と、彼が勤務する福井鐵工㈱の佐野洋介社長から福井河川国道事務所へひとつの提案をした。フリースタイルカヤックに適した場所が九頭竜川にあり、練習ができる場所に整備したいというものである。彼らの力になって欲しいと、当時の中村圭吾所長より紹介を受けた私は直ぐに彼らに会った。フリースタイルカヤックとは波やホール（落込み）など自然あるいは人工の激流の淵で、パドリングや操艇技術を競うもので、水上のロディオと呼ばれている。現地を視察すると、そこは、九頭竜川と支川吉峰川との合流点で、関西電力㈱の市荒川発電所からの放水が、毎秒30トン以上（平均毎秒50～60トン、最大毎秒80トン）が通年安定的に流れていた（写真-1）。フリースタイルカヤックの練習場所としては、国内のどこを探しても類のない環境だという。実現すれば、これは面白い。その理由は、カヤック愛好家のためだけでなく、スポーツも地域経済も住民も「三方良し」の「かわのあるまちづくり」ができると直感したからである。このまちづくりには、一目瞭然のコンセプトが必要であるため、メダルを取ることを現実的な言葉にして旗に掲げた。

(2) カヌー競技の現況

（公社）日本ボート協会の調べ（2016）によれば、競技カヌーを楽しむ「意向者」の人口は約2,500万人でボートとほぼ同数であるが、上位の「登録者」に従いその数は減少し、ボートの約1/3以下となる（図1）。これは、競技の難易度にもよるが、練習場の不備不足や指導者不足などが原因の一つと考えられる。

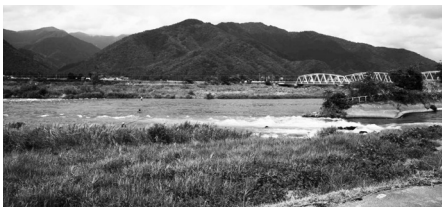


写真1　市荒川発電所放水路出口と吉峰川が合流し荒波が立つ。ブロックが顔を出し危険

図1　競技人口とポテンシャル層＊

国内・国際大会が開催できるフリースタイルカヤック場は、山形県朝日町最上川カヌーランド（通称たんの瀬）をはじめ、国内では数ヶ所しか無いのが現状である。その理由の一つに、日本地形の特性上、競技に適した水量が競技日に一年を通して安定しないことがある。自然環境に依存するため、競技当日の増水／減水によって競技ができないことや、練習の都度、長距離移動が課せられる。

カヌー競技には、スプリント、スラローム、ワイルドウォーター、ポロ、ドラゴンカヌーそしてフリースタイルなどがある。現在、スプリントとスラロームが五輪競技として選定されており、フリースタイルは2024年パリ五輪で正式種目になる可能性があり、乞うご期待である。

(3) 位置ポテンシャル

国内でのコース不足について先述したので、永平寺町と周辺の地政から考察する。図-2に中部・東海・北陸・近畿地方の主なカヤック場を示す。静水面を利用するスプリントは比較的多いが、フリースタイルは井田川（富山県）と長良川（岐阜県）の2ヶ所のみである。ここに、高速道路を重ねてみる。現在建設中の中部縦貫自動車道

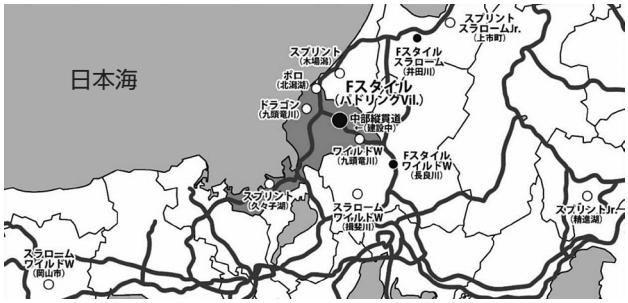


図2　カヌー場と位置ポテンシャル（主要高速道路を加筆）

は2026年春に全線開通し、北陸自動車道と東海北陸自動車道を接続する。九頭竜川と中部縦貫道は並走しており、インターチェンジから近いのが魅力である。2024年春には東京発の北陸新幹線が敦賀（福井県）延伸することで、日本のほぼ中心である福井県への高速交通移動で利便性が劇的に向上する。コンパスの針を永平寺町に置けば、周辺のカヤック場はほぼ円内に入る。つまり、高速道路などで利便性が上がり、かつ、周辺のカヤック場からのアクセスも良いこの位置のポテンシャルは非常に高く、今後、キラーコンテンツとなるだろう。

(4) 永平寺町の特徴

県都福井市に隣接する人口約18,000人余りの永平寺町は、県内最大の河川九頭竜川が中央を流れ、平行して国道416号線とえちぜん鉄道（勝山永平寺線）が走っている。現在建設中の中部縦貫自動車道が開通すれば、北陸自動車道と東海北陸自動車道を結ぶ要に位置する。大本山永平寺をはじめ多くの歴史文化資源が集積する。また、福井大学医学部、福井県立大学など学術研究機関も立地している。2020年には、「1人の遠隔監視者が3台の自動走行車両を運行する」1：3の運行体制を国内で初めて実現した。福井県の多くの中学2年生は、幕末の志士である橋本左内の「啓発録」に記された、「稚心を去る」、「気を振るう」、「志を立てる」、「学に勉める」、「交友を択ぶ」の五訓を学び、立志式を行う。禅道が生活になじんでいる永平寺町では、生活や教育の場で、挨拶、おもいやりなど規律正しい教えが今も普通に続いているのが、とても永平寺らしい。

(5) かわとまちづくり

2017年、松永選手、佐野氏、福井河川国道事務所、下川 勇氏（福井工業大学教授）と筆者らがコアメンバーとなって動き出した。フリースタイルカヤックを中心とした市荒川エリアではプロ選手の育成や大会誘致を、約10㎞下った鳴鹿大堰上流の瀞場（鳴鹿エリア）では観光や教育でカヌーを利用することとした。この2拠点を軸に、単なるスポーツではなく、禅道ならぬスポーツ道を背景にスポーツビジネスを主体とした川のあるまちづくり「パドリングビレッジ構想」を生み出した。メダリストを生み出す3つのポイント（2017年当時）を以下にまとめた。

①ハードウェア｜設備・機能

・静水コース（鳴鹿橋）、流水コース（市荒川）の整備

写真2　鳴鹿エリアでのパドリング体験（カヌー、SUPやEボート）

・観客席、オープンカフェ、テントエリアの創出

・エントリーモデルのカヤック資器材調達

・コース間の移動（河川敷地内の無人自動車）

・駐車場、上下水道、トイレ・シャワーなどの整備

・トレーニングセンター、宿泊施設　など

②ソフトウェア｜サービスの仕組み・組織

・カヌースクールの設立

・カヌー指導者、水辺の安全管理者の育成

・スポーツツーリズムのキラーコンテンツとする

・ショービジネスとしての観光資源

・周辺観光との連携

・河川関係団体との利害調整、スポンサー認定制度

・パドリングスポーツは福井が聖地と言い切る　など

③ヒューマンウェア｜選手・サポーター・禅

・義務教育期間中は永平寺町へ半定住する

・禅の精神×スポーツのオリジナルシラバス確立

・有名選手からの直接指導

・カヌー指導者、審判員、水辺の安全管理者の育成

・国際（国内）大会の誘致

・カフェ・BAR、宿泊などリバービジネス経営者支援

・学校教育、生涯教育に取り入れる　など

まずは、市荒川エリアにある発電所下流に競技用の波（ウエーブ）を造ることから始めたが、治水と相反する整備がすんなり行くはずがなかった。何度もくじけそうにもなったが、民間力主動で助け合いながら進めた。そして、2020年5月に行政、企業、団体、まちづくり会社など、多様なメンバーによる「九頭竜川かわとまち協議会」が設立し、ついに本格始動した。ちなみに、この協議会は民間主導であり、補助金などの投入が一切ない。

3.「ナミノバ」の創造

パドリングビレッジ構想は壮大である。市荒川エリアの未来図を見ていただきたい（図-3）。水力発電放水路の出口では、カヌーやラフティングなど荒々しさを楽しむ。

図3　市荒川エリア「ナミノバ」の未来図

一方、本川ではEボートやSUPなどを緩やかに楽しむ。河川敷では、観客席があり、テントやカフェBARなどが並ぶ。夜はライティングを施し、ナイトビジネスにもつなげ、新たなエコノミーの場として創出する。

協議会で、河合永充会長（町長）より、まずは市荒川エリアからスタートしよう！のご意見をもとに、フリースタイルカヤック場を造ることとなった。とはいえ前代未聞、どうすべきか悩んだが、まずは、水理学に基づいてコンクリートブロックを川底に配置してウエーブを起こす研究を行った。福井高専環境都市工学科准教授の田安正茂氏にご協力いただき、水路実験室で模型ブロックを沈めて試行錯誤した（写真3）。実は、アユとサクラマス

写真３　水路実験でウエーブと魚の遡上効果を研究する

が有名な九頭竜川において、私たちの行動で遡上を阻害してはならない。そのため、実験では遡上効果の向上も課題であった。実験結果から得たブロック配置は、関西電力様や地元漁業協同組合様と協議して、さらにブラシュアップした。

ついに、ブロック配置が決まったが、課題はつづく。発電所は年に一度の点検で水を止める。そのタイミングでしか工事はできない。今回は12月中旬のごく短い４日間だけ、失敗すれば次は一年後であった。

工費はどうするのか。確信はなかったが、クラウドファンディングと地元企業協賛で資金調達を始めた。クラウドファンディングでは、開始翌日には予定額の1,500千円を達成したことは、それ以降のプロジェクトを動かす大きな原動力になった。最終的には多くの方からのご支援で巨額資金が集まり、着工することができた。株式会社西村組（永平寺町）さんは、吹雪の中、「地元のためだ！」と夜を徹した工事は無事に期間中に終えた（写真4）。ただただ感謝の気持ちでいっぱいである。テストで松永選手がウエーブに乗った時の感動は今も皆の心の内にある。クラウドファンディングを利用した民間資金による河川改修工事は、おそらく国内初の取り組みになった。

写真４　河床にブロックを敷き、
競技用のウエーブを生み出す河川改修工事

市荒川の荒いイメージから、「ナミノバ」と命名した。安全祈願（写真5）を終え、2021年5月30日に一般オープンし、全国から続々とカヤッカーが集まってきた（写真6）。第一フェーズはどうにか成功した。

写真５　選手とコースの
安全祈願を行う

写真６「ナミノバ」オープン後、
多くのカヤッカーが集まった

4.「シカノバ」の展望

延長311.6m の鳴鹿大堰は、総貯水容量が667,000 ㎥となる巨大な堰堤である。その上流約800m付近の瀞場を、「鹿」からイメージし、「シカノバ」と命名した。

このエリアは、九頭竜川扇状地の扇頂に位置し、西流する九頭竜川が本覚寺の丘に当たり、一旦流れを北流に変化させる場所である。毎年８月下旬に一万個の灯篭が流れる「永平寺大燈籠ながし」の会場でもある。

シカノバは、カヤック初級者の練習や観光体験などエントリー型のエリアとする（図4）。水上にはスプリントコースを設定し、堤防上にはトイレや休憩施設、さらにはカフェ、レストランやBAR、照明や音楽も加えて、保護者から観光客まで楽しめる演出をする。自動運転車両がナミノバまで路線バスのような往来も夢見ている。

図４　鳴鹿エリア「シカノバ」の未来図

このエリアは、観光関係者からの関心も高く、パドリングスポーツを軸とした教育と人間力の向上を目指した新たな観光産業のコンテンツ化を進めていく。私たちの、リバーエコノミー創出に、乞うご期待ください。

5. おわりに

「パドリングビレッジ構想」は、デザイン思考によって川のあるまちづくりを進めている。物事の方向性や課題解決をデザイン思考で行うこと、さらには永平寺町らしさもこの思考で伝えていきたい。

図５　パドリングビレッジと、ナミノバ、シカノバのロゴ

フリースタイルカヤックをはじめとするカヌー競技は競技人口が少ないため、メダルに手が届きやすい。「ナミノバ」では国内唯一であろう、通年安定したウエーブがあることから、世界レベルの選手育成も決して夢ではない。将来は、海外の強化選手が来ることも十分考えられることから、来年には、世界大会の誘致を目指している。スポーツを軸にしたまちづくりで最も大切なことは、小・中学校の９年間を禅の文化を育む永平寺町に定住（一時的なので半定住）し、人間力豊かなスポーツ選手の育成することである。本気でメダリストを目指すなら、永平寺町に住むべきである。その理由が、川に活きる永平寺町には、ある。

最後に、この構想にご理解とご協力をいただきました地元住民の皆様、九頭竜川中部漁業協同組合など各種団体・組合様、福井工業大学など学校関係者様、クラウドファンディングでご支援いただきました皆様、企業協賛いただきました地元企業様、施工にご支援いただきました工事関係者様、国土交通省・福井県・永平寺町の皆様、そして九頭竜川かわとまち協議会でご尽力いただきました皆様、本当にありがとうございました。今後、この構想はさらに加速しながらまちづくりを推進していきます。引き続きご協力をよろしくお願いいたします。

参考文献

*(公社)日本ボート協会・(公社)日本カヌー連盟, ボート・カヌー競技のレガシー計画